



## 臨床研修で思うこと

～5年間の指導経験から～

那覇市立病院 外科 上原 忠司



2004年に始まった新臨床研修医制度も5年目を過ぎ、診療科別の医師数の偏在や不足の問題、医師数の地域間格差の問題と重ね合わさって、この制度に対する賛否についてはさまざまなかたちで議論がなされ、最近では制度の見直し案まで浮上し、当初の理念とは逸脱した方向に向かいつつある。今後の動向が注目されるが、制度の違いはどうであれ、臨床医を目指す医師の誰もが研修医という時代を経験するものであり、いわば避けては通れない道でもある。この5年間、指導する立場として研修医と関わってきた経験から、ひとりの外科医の少し偏った意見となることへの御理解をいただいて、研修医に望むこと、指導医として気付いたことや考えさせられた点を中心に述べたいと思う。

まずこの稿を執筆するにあたり、新臨床研修医制度における臨床研修の基本理念を再確認してみた。そこには『臨床研修は、医師が、医師としての人格をかん養し、将来専門とする分野にかかわらず、医学及び医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ、一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう、プライマリ・ケアの基本的な診療能力（態度・技能・知識）を身に付けることのできるものでなければならない』とある。

そこで基本的な診療能力はどのようにして身に付くのだろうか、自身の経験と指導する立場から考えてみた。

まず検査手技や手術手技といった技能的なことは、経験すればするほど身についていくものであると考える。実際に教えてみると、1回目よりは2回目というように回を重ねるごとに上

達し、最初は頼り無かった研修医が2年目ともなると後輩の研修医にその手技を教えている姿を病棟や救急外来の場でよく目にする。また知識についても多くの疾患を経験することによりどんどん身に付いていくものであり、疾患によっては、時に指導医である私以上の知識を持ち合わせていることに驚きを感じる。このことは多数の科を回り、多くの疾患を経験することによって幅広い知識を持った医師を育てるということこの研修制度の大きな目的でもあり、利点ともいえる。是非、与えられた機会を逃すことなく、上級医の指導のもとに積極的に学び、多くの経験を積んで診療の技能や知識を身につけてほしいものである。

診察能力のなかでも個人的に最も重要と考えていることは、診療態度すなわち患者さんや医療スタッフへの接し方である。特に患者さんとの接し方を一歩間違えると、手技はおろか診察さえ受け入れてもらえないということも起こり得る。あるいは検査手技や手術手技がどんなにうまくても、また、より適格な指示を出したとしても、患者さんからの信頼がなければ、嫌な思いをさせるだけである。

診療態度というものは、教科書での勉強や他人から教えられて取得するといった類いのものではなく、また本人の資質や性格、その時々での精神状態、接する相手の状況や態度によって左右されるものでもある。したがって外来診療や病棟回診において、先輩医師が患者さんと接する時の態度や話し方を参考に自分自身で整理し、自分に合ったより良い方法を選び出して対応していくべきものであると考える。また、信

頼を得るには技能や知識の取得も大切ではあるが、ベッドサイドに赴いて、患者さんと直に接することがより重要である。『検査や手術の手法を学びたいければ、まず患者さんからの信頼を得なさい。そのためには何度でもいいから患者さんのそばまで足を運んで対話し、その訴えに耳を傾けなさい!』私が研修医時代に指導医から口酸っぱく言われたことであり、また研修医を指導する際によく話すことでもある。

制度が5年も経ち、各病院の研修システムがある程度確立され、その情報が明らかになると、研修を受ける態度も少し変化してきたように思う。研修医をみていると、既に将来の専門とすべき診療科を決めて初期研修にのぞむタイプと初期研修終了後に将来の診療科を決めるタイプがある。また研修を受ける態度では、初期研修の主旨を理解し、どの科でも積極的に

研修していくタイプと興味の無い分野には消極的かつ中途半端に研修していくタイプに分けられるが、年を追う毎に後者の傾向が強くなっているのではと感じている。その善し悪しについての議論をするつもりは無いが、基本的な診療能力を身につけるための貴重な最初の2年間を大切に過ごしてほしいと願うものにとっては、この2年間を就職活動の一環として位置付けることがないことを望む。何らかの志を持って医師を目指し、6年間の医学教育を受けて医師となるのであるから、少なくとも後期研修を見据えたある程度のビジョンを持って初期研修に望んでほしいものである。

最後に、社会人としての自覚と医師として与えられた責任を十分に理解して行動し、初期研修で得られた経験や知識を将来に活かすべく充実した研修生活を送ってほしいと願う。





## 初期研修を振り返って



那覇市立病院 初期研修医2年目 喜瀬 高庸

早いもので医師となって2年が過ぎました。これまでの研修期間を振り返ると表現できないくらい濃厚な2年でした。

平成19年の4月に医師としての生活がスタートし、社会人1年目でまず感じたのは、働いて給料を頂くわけで、学生の時みたいな妥協は許されない事。私は内科研修からスタートしたのですが、初日の仕事が終わったのがいきなり24時を超え、噂には聞いていたけれど研修医の過酷な環境は真実であったのかと愕然としました。そして来る日も来る日も早々朝採血の日々。眠気と緊張と低血糖と闘う日々でした。学生生活とはひっくり返るほどの生活パターンで、自然と早寝・早起きの習慣が身につきました。医学ではなく、まず医業に慣れろとは良くいったものです。研修のローテーションで、大学病院でも研修をさせて頂きました。病院が変われば学ぶべき事もまたいろいろあり、慣れるのに一苦労しましたが、多くの友人、先輩、諸先生方にお会いする事ができました。

辛い事だけではなく楽しい事や充実した事ももちろんたくさんありました。実際に検査や治療を自分で計画し、治療が実際にうまくいくと患者さんから感謝されました。様々な職種の人たちと話ができるのはとても興味深いものでした。臨床現場においては、初めて行う手技ばかりで、日々自分の力になっているような気がしました。またビーチパーティーをしたり飲みにいったりして、同期、レジデントやスタッフの諸先輩方に日々の悩みを相談したり、時には？騒いだりもしました。1週間だけ休暇を頂き、台湾で一人旅をしました。長崎ハウステンボスで初めての「学会発表」というものも経験しました。気分転換のため、少しでも時間があれば、大学に部活に顔を出し後輩の顔を見て彼らから元気ももらいました。

振り返ってみると、この2年は人生の中で最

も濃密で早く過ぎていった2年でした。あと少しで研修を修了する？予定ですが、これまでの経験を踏まえて、研修する環境はどういったものがよいのか自分なりに考えてみました。まず症例が豊富である事。1年目というのは医師免許取得後ではありますが、何も知らないといっても過言ではありません。その中で多科に渡り多種多様な病態に触れる事ができるのは長い医師人生の中で研修医の時しかないのかもしれないかもしれません。指導医の先生方に質問しやすい環境も大切だと思います。もちろん自分で予習したうえで質問をするという姿勢が大切かなと思います。また研修医というのは、必然的に雑務は多いものです。その中でフィードバックを得る事ができるのも重要だと思います。具体的には、入院時の診察、入院時指示、検査のオーダー、ムンテラの時間調整や診療情報提供書の作成などなど日々の業務をこなす中で、指導医の先生方から医学的な知識やアドバイスが得られれば、雑務に負われつつも充実した日々が送れるでしょう。その他に図書館やup to dateといった文献検索設備が整っている事も重要だと思います。その点那覇市立病院は以上に述べたような環境が整っており、研修するにはおすすめの病院です。

長くなりましたが、初期研修というのは医学部を卒業後皆に与えられる2年間です。積極的に行動しなければ、たかが2年、されど2年で雲泥の差がつくと思います。理想的な研修環境であってもそれを生かすも殺すもその人次第です。この2年の経験を通して、豊富な知識を習得するのはもちろん大切ですが、患者さんの訴えを全人的にくみ取れる医師でありたいと思うようになりました。研修終了後も初心忘るべからず、今の気持ちを大切に医学・医療に取り組んでいきたいと思っています。